

224 肝胆道及び消化管の同時scanについて —CINE表示の臨床的有用性—

小畑正木, 木下富士美, 油井信春, 戸川貴史 (千葉県がんセンター核医学診療部), 竜 崇正 (同, 消化器科)

消化管再建術後の肝胆道, 消化管の同時scanを胆管癌, 胃癌, 膵癌等の31症例に行い, よりdynamic なCINE表示の有用性を検討した。絶食の患者に ^{99m}Tc -MAA又は $^{\text{p}}\text{hytate}$ 3mCiを混ぜたプリンを経口投与し, 直ちに仰臥位として $^{99m}\text{TcPMT}$ 5mCi投与してdata収集し(256matrixでFrame/2min計28Frame), 後にCINE表示で再生する。使用装置は東芝製GCA-90B-W2。CINE画像はVIDEO TAPEに収録し高速にて再生すると, 胆汁のうっ滞, 逆流胆汁と食物の混和状態等が良く観察できた。これにより術後低栄養の病態説明, 不定愁訴の診断, 通過異常等との関係が把握できた。CINE表示を用いた動的観察法は胆汁と食物の流出状況が客観的で分かり易くなり臨床的有用性が高い。

225 SPECTによる術後残存膵機能検査法

斎藤康子, 高田忠敬, 安田秀喜, 内山勝弘, 長谷川 浩, 土屋繁之, 三須雄二, 四方淳一 (帝京大学第一外科) 国安芳夫, 新尾泰男, 東 静香 (同放射線科)

現在, 膵外分泌機能検査としてはPFD試験が一般的であるが, 腎障害, 肝障害など種々の因子が関与するため特に術後に行なうには問題がある。今回我々は, 膵疾患術後の残存膵外分泌機能検査として, ^{75}Se -selenomethionineを用いた膵スキャンによるSingle photon Emission Computed Tomography (以下SPECT)を利用した。SPECTを用いることにより, 従来の膵スキャン像では肝と重なって同定が困難であった症例においても膵を確認することが可能となった。対象は, 膵頭十二指腸切除術後9例, 膵体尾部切除術後2例である。結果としては, 同一術式であっても症例により残存膵のスキャンイメージに差がみられ, 膵外分泌機能障害の程度を示唆するものと考えられる。

226 I-123 HIPDM を用いた膵シンチグラムの臨床的検討

山本和高, 佐治英郎*, 久保聡一, 柴田登志也, 藤林康久, 米倉義晴, 小西淳二 (京大 放核, *薬学部)

健常者4例, 膵癌7例, 慢性膵炎5例を対象にI-123 HIPDM を用いた膵シンチグラムを臨床的に検討した。

健常例では3時間後のSPECT像で, 膵に肝や脾と同程度の放射能の集積が認められ, 膵の全体像が明瞭に描出された。腸管にはわずかに放射能が認められたのみで, 腎は描出されなかった。膵癌及びそれより尾部の膵実質は欠損像を示した。慢性膵炎のうち4例では, 膵の放射能は肝よりも低下していたが, 膵の全体像が認められた。著明な膵石を伴った1例では膵は描出されなかった。

I-123 HIPDM はこれまで膵シンチグラム製剤として利用されてきた ^{75}Se -selenomethionineよりも臨床的有用性があると考えられた。

227 0-15標識water によるdynamic PETからの膵血流量の測定

久保聡一, 山本和高, 西澤貞彦, 岩崎 康, 向井孝夫, 佐治英郎, 柴田登志也, 玉木長良, 米倉義晴, 小西淳二 (京大 放核)

膵は画像診断の難しい臓器であり, またその機能の評価においても検査法の煩雑なものが多い。今回, 我々は0-15標識waterの静脈内へのbolus投与後, 膵臓部のPETによるdynamic scanを施行し, 膵の血流量を計算しそのImageを作成した。

正常の膵臓は, Image上で血流の多い臓器として明瞭に描出された。膵癌症例では, 膵癌部は血流の少ないdefect部を呈したが, 非癌部においても血流の低下を認めた。慢性膵炎症例では, 全般的な血流の低下を認めた。

膵血流量は膵機能と密接な関係があると考えられ, 膵機能を表す一つの指標になりうると思われる。